

□ 書評 □

福田宏明・三笠元彦・伊藤信之(編集)

肩診療ハンドブック

石井清一

(札幌医科大学整形外科)

世界に先駆けて我が国に肩関節学会が設立されたのは1974年である。その後のスポーツ医学の普及、鏡視下手術の発達、それに画像診断技術の目覚ましい進歩を背景に、肩関節外科も著しい発展を遂げてきた。その間に新たに概念が確立された疾患も幾つか挙げることができる。新しく発見された診断技術や手術手技も少なくない。これらを整理し、臨床家の水先案内的な参考書としてまとめられたのが「肩診療ハンドブック」である。

本書の編集にあたった福田宏明氏、三笠元彦氏、それに伊藤信之氏は、我が国の肩関節外科の発展に主導的役割を果たしてこられた整形外科医である。学会での福田氏の討論のすすめ方は極めて科学的で、1本の明快な論理で貫かれている。推理小説のページを1枚1枚めくっていくように物事の本質を明らかにしてくれる。三笠氏は内外の殆ど全ての関係文献を検索して得た知識を整理し、我々に片寄りのない新しい見解を示してくれる。伊藤氏の明晰な頭脳は、ややもすると曖昧さを許容してしまう臨床医学が、科学として成り立つたための道筋を我々に教えてくれる。

本書を一読して感じることは、3人の編者の特徴が良く表れているということである。序文では本書の編

集方針として、①わかりやすく、②最新情報を盛り込み、③標準的治療法に加えて著者の推める方法を述べ、④項目は網羅するが、頻度の高い疾患を重視した、と書かれている。現在、我が国で最も活躍している39名の肩関節外科医の原稿に、3名の編集者が上記の編集方針に沿って手を加えて本書を完成している。

本書は14の章から成るが、解剖、診断法、治療法などの総論に5つの章をあて、全体の3分の1を費やしている。各論では肩関節疾患を9つの章(先天性疾患、脱臼・亜脱臼、骨折、筋腱疾患、神経疾患、変性疾患、炎症性疾患、腫瘍、それにスポーツ肩)に分類している。特にここ20年間で病態の整理が進んでいる腱板断裂、肩峰下インピンジメント症候群、腱板疎部損傷などの「筋腱疾患」と、反復性肩関節前方(亜)脱臼、習慣性肩関節後方脱臼、動揺性肩関節、随意性肩関節脱臼などの「脱臼・亜脱臼」、それに病態がまだ不明と言わざるを得ない五十肩などの「変性疾患」には多くのページをさいて、現時点で得られている知識が明快に解説されている。本書は肩関節外科の進歩を理解し、適切な診療を行う場合の格好のガイドラインである。肩関節疾患を扱う専門医ばかりでなく、一般整形外科医、理学療法士などの座右に是非置いておきたい参考書である。

最後に、本書の編者お一人、伊藤信之氏が本年1月28日、悪性腫瘍のため54歳の命を終えられた。その才能を惜しむとともに、心より御冥福をお祈りして本書の紹介としたい。

●B5 頁347 図169 写真213 表24 1998 定価(本体14,000円+税) 〒400 医学書院・刊